

我が悠久の山々・60年の軌跡

山に逝きし仲間に捧げる

2000 回登山・回想の日々

長泉麗峰山の会 後藤隆徳

はじめに

2023 年 11 月、少し早かったが、天城・猿山で山の仲間が「2000 回登山」を祝ってくれた。思えば、60 年は長い歳月だった。

記録に残る、山行 NO.0001 は、1965 年 4 月（昭和 40 年）箱根・玄岳～熱海の「カモシカ山行」だった。丹那まで路線バスを利用した。

60 年前は、娯楽が少ない時代だった。勿論、車はない。休日は、おにぎりを持って山野跋涉（ばっしょう）が唯一の楽しみだった。従って記録にないが、それ以前もハイキングは行っていた。ちなみに、富士山は 15 歳で初登頂した。



1966 年（昭和 41 年）

世相＝ミニスカート、全日航機羽田沖墜落、ビートルズ来日、文化大革命、6 月「袴田事件」（2024/10、無罪確定）

流行歌＝悲しい酒・君といつまでも・絶唱・星フラメンコ・涙の連絡船

山行 NO.0006 1966/03（昭和 41 年） 東丹沢・源次郎沢

初めての本格的登山は、東丹沢・源次郎沢だった。19 歳。勤務する国産電機 KK（2015 年、マーレジャパン株式会社に移行）の山岳部先輩に誘われた。

当時の東丹沢は、御殿場線の蒸気機関車で松田駅に行き、新松田から小田急・渋沢駅下車、バスで登山口の大倉に向かった。

当日は、好天で暖かだった。先輩が、近く生まれる子供の名前を「源次郎にするか」と悪い冗談をいった。装備は殆ど借り物。ズボンは、学生ズボンを切って、ニッカー風に仕立てた。

初沢登りの感想は、「山は岩で出来ている」だった。それはその後「岩に傾倒する」キッカケになる山行となった。井上茂貴先輩が、「ゴトーは、バランスがイイ」と褒めてくれた。嬉しかった。山岳部の先輩に教えられたことは、沢を始める前、縦走で「山の全体を把握すべき」と教えられた。

また、山は「読んで・登って・書く（記録を残す）」であった。当時は、SNS・スマホはない。情報は、「山と溪谷・岳人・岩と雪」などの山岳雑誌だった。

毎月発表される記録を食い入るように読んだ。自身の記録も克明に残した。パソコンはない。大学ノートに書き残す。結局、ノートは 37 冊になった。

2000 回登山で皆さんにいわれたことは、「良く記録を残した」である。記録が残っ



ズボンは学生服、靴はキャラバン・シューズ。

腰のハンカチが可愛い??



1966/03 東丹沢・源次郎沢、上は井上茂貴氏

ていなければ上った確証はない。「私もそのくらいは上っている」では、話にならない。記録は、自身の分身といえる。

しかし、一口に 2000 回といっても改めて半端ではないと感じた。現在のように、土日・祭日が休みなら、年間 50 日は可能。それでも、500 回は 10 年、1000 回は 20 年必要となる。

昔、休日は日曜日・祭日だけ。連休はなかなか取れず、大きな山は会社を休まないと行けなかった。勢い「アイツは会社を休んで山ばっかし行っている」と白い目で見られた。昇給・昇進の査定は当然、悪かった。それでも後悔はなかった。

遠路の北アルプスなどは、退社後、会社から山の格好と荷物で御殿場線・下土狩駅に行き、沼津から東海道線で富士に着き、身延線 19:00 の最終電車に乗って甲府駅着だった。甲府駅で仮眠し、2~3 時の汽車で山に向かった。汽車は満員だった。

従って当時は、乾徳山・大菩薩など日帰りは出来難くかった。一泊である。今では、下山後温泉付き。時代は変わった。

しかし、同時に失ったものもある。連休は中部・東部の岳人が最終電車の乗り合わせ、交流し人脈が出来たが、車時代到来で霧散した。甲府駅のいわゆる「ステーション・ホテル」にも何回か泊った。時には、暴走族がバイクで暴れた。

移動の電車・バスは、兎に角、時間が掛かった。前述の丹沢など東丹沢はまだ良いが、西丹沢の沢日帰りは厳しかった。従って、バイクで何回か行ったこともある。バイクは、荷物が重いのと雨は難儀だった。

随筆

山靴のうた



工具係 後藤隆徳

はじめての山

生まれてはじめてどこの山に登ったのだろうかと思いつても、今ではちよつと思ひ出せない。

しかし、あれは確かに中学一年の時だつたと思つたが、箱根の玄岳へ登つた時の事は良く覚えてゐる。その頃僕が通学していた中学校には少しばかり玄岳附近に山を所有していた。

まあその日は山の下刈りにいったのだが、悪友と三人で相談して今日は一つ一番で玄岳頂上まで行こうとまとまつた。

結局、跳ばしに跳ばして、皆より一時間も早く頂きを踏んだ覚えがある。その日は随分天気も良く、駿河湾も良く見え、気持ちも良かったと覚えてゐる。その時、待てども待てども先生以下はこないものだから早弁をしちやつて、本当の弁当の時間に困つた物だつた。その時の山は、もちろん目的は下刈りであつて山登りでなかつたか。皆より少しでも早く頂きを踏んでやろうというスポーツ的要素を含んだ山だつたと覚えてゐる。

三月の想ひ出

源次郎沢

山への憧れは、そんな時ふと僕の心の中に芽生えた。

四人は蒼空の下、山村に着き、下を流れるせせらぎが聞える林道を歩いてゐた。蒼空の日、僕は先輩につれられて丹沢にきた。林道を約一時間位歩くと行手に小屋が見えた。そこで四人は本谷の巨石がゴロゴロ／＼する中で休息をとつた。僕を除く三人は、いづれも山の中堅者ばかりで、その人達についていけるだけで僕はうれしく、そしてついていけるだろうかと思ひ心配だつた。空は蒼く、新緑に映える山は美しかつた。

沢は始めゴロ／＼状で少し行くと最初の五米位の滝が僕達をむかえてくれた。先輩が二人先に歩き、僕は三番目を歩いていく。途中少しむずかしい様な滝が有つたが僕は慎重かつスピーディーに登りきつた。滝を登りながら何かイキ／＼した熱い物が僕の胸の中に湧いてくるのをその時覚える。すばらしく充実した気持ちになつたのもそんな時だつた。大滝の上で時計が十二時を少し回つたので昼食とする。サエない僕の弁当の中に一つだけ手作り？の物がある。昨夜寮の先輩が作つてくれた天ぷらであつた。その先輩は、ちよつとそんなガラには見えないが、一部の寮生の中では、有名な天ぷらであつた。味気ない中で少し醤油の足りないてんぷらは、大変うまかつたが、残念な事にそこで食べたのが最初で最後であつた。

昼食後、ガレを慎重につめればヒョコリ稜線に出る。僕の山靴は先輩にもらつたお古の靴なので水が入つたりしてあまり良い感じでなかつたが稜線に出て雲を仰げば何か一つの事をやりとげた充実感を感じる。通称馬鹿尾根を一気に下れば大倉も近い。



記録ノート

山行 NO.0010 1966/08（昭和 41 年） 南ア・荒川三山

初めて南アルプス・荒川三山に入った。（昔は、「山に行く」でなく「山に入る」）といった。前述の如く、身延まで電車で行き、バスで新倉に行き登山開始。

現在、荒川三山は、樺島から二軒小屋に入るが、当時は、転付峠を越えた。峠は標高約 2000m。新倉は約 515m。単純標高差は約 1500m。時間は約 9 時間掛かった。兎に角、「キツイ・シンドイ・エライ」だった。

唯一、記憶に残るのが、峠で初めて見た「クルマユリ」の美しさだった。二軒小屋は、掘っ建て小屋。「飯場」そのものだった。山岳部は、赤い帽子を被った。



転付峠付近

当時は珍しいカラー写真

奥から、井上国利・後藤・
井上茂貴・渡辺・瀬戸行男



悪沢岳？

後列・井上茂、後藤

中列・井上国、瀬戸

前列・渡辺・菅野唯雄・星谷幸雄

鎌野剛



ズボンは、G パンを切った



山行 NO.0011 1966/09 西丹沢・小川谷廊下

会社の山岳部は、夏山の荒川三山が終わると「慰労山行」と称して、西丹沢・小川谷で一泊山行を楽しんだ。私は初めての西丹沢・小川谷。期待で胸が膨らんだ。

当時、西丹沢・玄倉川は、「丹沢黒部」と呼ばれ、まだまだ未開の領域だった。1979年（昭和 54 年）完成の三保ダム（丹沢湖）は、まだ完成していなかった。

例によって、御殿場線・蒸気機関車で行く。ちなみに、御殿場線が電化になったのは、1968 年（昭和 43 年）だった。



昭和12年 山北付近（ネット）

谷峨駅で下車しバスで玄倉に向かった。ただ、バスは神縄までで、玄倉まで歩いた様な記憶だが、ハッキリしない。当時、玄倉川林道は伸びていたが、小川谷林道はなかった。

小川谷出合に二か所吊り橋があり、玄倉川を渡った。左岸の道を進むと、養鱒所があった。付近は逃げたマスが釣れると話題だった。林道がない小川谷は静かな別天地だった。白砂にテントを張り、弥七沢や小川谷で遊んだ。

夜は、夏山を振り返り大宴会だった。先輩は、ここを「小川谷別荘」と呼んだ。



国産電機山岳部キャンプ（写真は別日のもの）

山行 NO. 0025 1967 年 10 月 山中湖・明神峠～三国山

秋のハイキングでカモシカ山行。翌日、バスの中で眠くて仕方がなかった。ハイキングはよく行った。



下土狩駅前

後列左から 古屋・？・？

大和田・西山・横田・後藤

前列左から 塚田・？・？



国産電機山岳部

その他のハイキング

日時・場所不明



日時・不明

東丹沢・水無川林道？



日時・場所不明



71 年・紅葉台



日時不明・越前岳富士見台

1967 年（昭和 42 年）

世相＝今井・若林女子初マッター北壁成功、高田光政・ヨーロッパ三大北壁成功、西
穂水平電雷事故、ツイッギー来日、巨人日本一、吉田茂死去
流行歌＝夜霧も今夜も・世界は二人・ブルーシャトウ・真っ赤な太陽

山行 NO. 0026 1967/11（昭和 42 年） 南ア・鋸岳～甲斐駒ヶ岳

1 日目は、戸台から角兵衛沢を上る。沢はガラガラで上り難かった。初めてのアルプス縦走・山中泊。稜線に出て、第一高点付近で幕営。テント天井に干した靴下が鍋の中に落ちたが、先輩たちは、「どこ吹く風」で食べていた。

2 日目は、「鹿穴」を潜った。ボロボロに風化して、悪い所と聞いていたが、それ程の感じではなかった。六合石室に泊った。水場が遠かった記憶。

3 日目の山頂下の岩場の針金を覚えている。無風快晴の山頂から、新雪を纏った仙丈ヶ岳が大きかった。黒戸尾根を下山した。黒戸尾根の紅葉が見事だった。何枚か拾って手帳に挟んだ。竹宇からバスはなく、国道 20 号まで歩いた記憶がある。



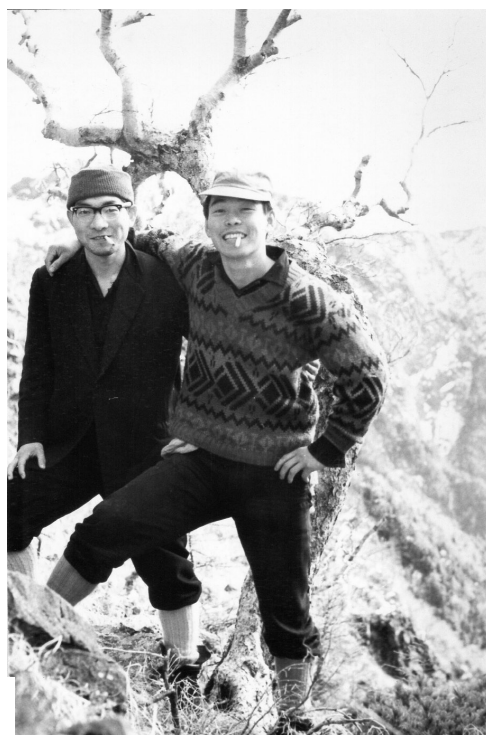
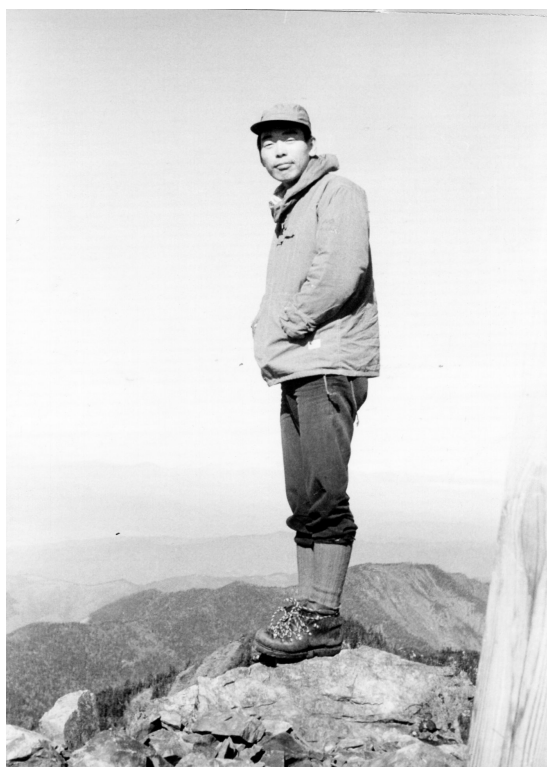
鋸岳・第一高点

後列左から、鎌野剛・瀬戸行男

前列左から、井上茂貴・井上国利・後藤・星谷幸雄



バックは仙丈ヶ岳



左・井上茂貴氏



北岳・仙丈ヶ岳



八ヶ岳

1968 年（昭和 43 年）

世相＝北アルプス大量遭難、川端ノーベル賞、3 億円事件、キング・ケネディ
暗殺、メキシコ五輪、アポロ 7 号打ち上げ、札幌医大日本初心臓移植
流行歌＝天使の誘惑・星影のワルツ・恋の季節・伊勢佐木町ブルース

山行 NO. 0030 1968/06（昭和 43 年） 北ア・槍ヶ岳 後藤・古屋良三

1968 年になった。私は 21 歳を数えた。次第に大きな山への憧れが膨らんだ。しかし、会社の山岳部の職域山岳会での活動は限界があった。

同じ会社で、中堅社員が何人か纏まって休暇を取得し、業務を休み、山に入ること自体、当時は無理があった。

荒川三山・甲斐駒に上った私は、年が明け、更にいい山に行きたかった。山岳部で 8 月に白根三山が計画されていたが、それでは物足りなかった。とは言え、山岳部の先輩は、積極性はなく頼れなかった。

結局、登山欲求を抑えることは出来ず、山岳部の後輩二人で槍ヶ岳を目指した。何故、槍だったのか不明。単に北アの比較的上り易い有名山だったか



初めての北ア・槍ヶ岳に入った。まだ、奈川渡ダム（梓湖）が無い時代で、松本駅から延々と乗り合いバスで梓川を上高地に向かった。途中、何とかの滝で、休憩がある、ノンビリした時代だった。車社会でないから、当然、松本まで電車だった。

2023 年 5 月連休、久しぶりに「大糸線」に乗った。「大糸線」は、松本～糸魚川を結ぶ路線。そして調べたら、私が槍ヶ岳登山した 10 月まで、現在の「白馬駅（当時は、「はくば」でなく、「しろうま」＝代馬・・・雪形の代掻き馬）」は「信濃四ツ谷駅」と呼ばれていたという。知る由もなかったが、そんな歴史を改めて知った。

初めての北アは、見るモノ聞くモノ全てが新鮮だった。槍沢は雪が多かった。この時、降雪に遭ったが、6 月に雪が降ったことに驚いた。殺生ヒュッテに泊った。翌日、槍の上りで、何処かの女子大生に「大きなバケツ」（ピッケルで掘った大きな足場）を掘って上げて大いに喜ばれた。



後列右が、フルヤさん
1968/06 槍ヶ岳山頂

しばらく「文通」(今は死語??)した。妙高にスキーで入った写真を頂いた。しかし、それ以上の発展はなかった。後列右はリーダーの「フルヤさん」でキレイな方だった。今もお元気だろうか??お会いしたですね。



フルヤさんに頂いた妙高山の写真



槍沢



河童橋

最終日、赤石避難小屋で宿泊。当時は、掘っ建て小屋だった。赤石東尾根の「サギソウ」に感動。

単 独 行

この所岩にばかり接する機会が多かったが、何かむしように山が恋しく、徹底的に、あの頂を、あの稜線を歩いてみたくなった。単独な僕はそれをすぐに実行に移す……。

そして今度は一人で行ってやろうかなと思った。一人でどれだけ歩けるかという挑戦的な気持も含めて一応茶臼岳から赤石岳の縦走を計画する。もちろんその中には、あの偉大な赤石岳の頂をこの足で踏みたいという夢もあった。

雨にけむる沼津を一人後にし車中の人となる。金谷駅にて一泊し大井川鉄道の始発に乗る。大井川鉄道に乗るのは初めてであったが鉄道と呼ぶのには、ちょっと首を傾げたくなるようなボツコな

車であった。バスを捨て、畑薙ダムのあの長い吊橋を渡れば山はもう目の前だ。長いアプローチの後、結局バテにバテて横窪小屋に四時半入る。小屋は番人が居なく無料の為か随分人がいた。翌日五時起床五時半簡単な朝食を済ませて稜線めがけて一気に登る八時待望の稜線に跳び出れば、太陽も光々と輝いていた。いったん鞍部に荷をデポして茶臼岳に登りました。

やたらに巨大な聖岳と赤石岳は目の前に堂々と天に向っている。上河内岳をものにした頃よりガスが湧き出し天気も下り坂となったので、その日は早々とまた無料の聖平小屋に跳び込む。

翌朝ガスの聖平小屋を後にし 聖岳めざす。十月も後半になると朝夕山はかなり冷える。今日もさむくて朝のうちどうも調子が出来なくよわってしまった。

聖岳三千十一米の頂に立つ頃には僕の鼻の下ヒゲにも霧氷が白くついていて、寒いので早々聖岳を後にし、兎岳、小兎岳、中盛丸岳、大沢岳と増々僕のピーク、ハンティングは冴えてきた。三千米の稜線には、珍らしいと言われる百間平を過ぎ、いよいよ最後の大物赤石岳に目前と迫る。憧れの山にきた。とうとう。

その頃には、天気もだいふ良くなり蒼空が見えはじめてギラ／＼した太陽が照りはじめてきた。

本当は今日は忙しい日である。冬になったり夏になったり。憧れの赤石岳に僕は一足一足登る。途中一人の人間に逢う。聖岳までは少し位人間もいたけれども、さすがにここまでくると人間もいなくなる。何か久し振りに見る人間の様で僕が、その人の顔をシゲ／＼と見ていると、その人間も、僕の顔をシゲ／＼と見ていた。まあこの際貴重な人間なのでカメラのシャッターを押して

もらうことにした。お礼にタバコを進呈する。彼と別れ僕はなお頂上をめざす。十四時半赤石岳をハントする。やたら静かな今日の頂だ。だが登頂を喜び合う友は今日はいなく喜びは自分自身に聞かせるしかなかった。天気は馬鹿良くてあの時地球の丸いのがよく解った？時間が早かったので赤石小屋まで今日中に下ろうと思つて下降路を捜したが発見出来ず今夜は赤石岳頂上避難小屋に泊る。避難小屋はかなり痛んで戸などフツ飛んでいました。食料もだいぶ減つてもうロクな物もなく簡単な食事はすぐ終えてしまった。まだ六時半だというのに秋の日没は早く外は暗い。ラジオは無かったので耳に入ってくる物といえば、外を渡るあまり感じの良くない風の音と、その風に舞う空缶のカラ／＼／＼という音だけだった。十時、何かむしように淋しくてやり気れなくなる。動いている物といえば隙間風にゆらゆらゆれるツエルトの中のローソクの灯と僕の心臓だけ。こんな時せめて犬でもいてくれたらなあと思う。ツエルトからソツと顔を出すとガランとした小屋の中はまるで死んだ様でした。街にいた時あんなに一人になったか、どうしてこんなに人が恋しいのか。しかし、ただ一人ジツと孤独に耐えるだけしかないすすべは無かったのです。翌朝、蒼空を期して窓から半分顔を出したが、濃いガスに雨が混つて降っていた。もう一夜？とんでもないと朝食も取らず小屋を跳びだす。昨日の下降路は指導板の誤りで本当の下降路は、もう一つ向こうの小尾根から下っていた。僕は後ろを振り返りつつ雨の中を逃げる様に樺島めがけて下山する。その中で憧れの頂は雨の中にボーッと煙っていました。

国産電機労組青年部 機関誌「窓」第6号 1969/6（昭和44年）発行

山行 NO.0049 1968/11 伊豆・城山

1966年3月、生まれて初めての沢登りを東丹沢・源次郎沢で経験したが、それから沢登り、岩登りに熱中した。大きな山は、時間・お金が掛かる。その点、沼津アルプス・鷲頭山のロック・ガーデンは、手ごろな山・岩場だった。

当時、御殿場線、バスを乗り継いで、静浦保養所前で下車し、東に聳える岩場を目指した。岩場には、近郊の多くの岳人が訪れて岩の訓練をしていた。そこで、沼津市の社会人山岳会「北嶺登行会」と出会った。

当時は、社会人山岳会が全盛だった。沼津市だけでも、「沼津岳友会（津島）」「睦の会（全員緑の制服を着ていた）」「静岡登攀倶楽部・沼津支部（小花）」など。

会長は大村勝彦。沼津・図書印刷に勤務していた。年末に甲斐駒・摩利支天壁を計画しているので入会を勧められた。職域山岳会では、限界を感じていた私は入会し、暮れに甲斐駒・仙丈ヶ岳を目指した。

例会は沼津・ワシントン靴店（現在は閉店）の二階で行っていた。会員は若い人が多かった。会はピーク・ハントでなく、バリエーション・岩・沢登り志向だった。渡邊吉美・瀬戸敬三（1972年・富士山大量遭難で逝去）、芹澤・加藤・後藤育・池田・勝亦久・小川（酒井）洋子らと知り合った。



鷲頭山ロック・ガーデン



伊豆・城山



三ッ峠・屏風岩

山行 NO. 0052 1968/12/31～1/5 南ア・甲斐駒摩利支天・中央壁右ルート
水晶沢、仙丈ヶ岳

本格的冬山は初めてだった。例によって電車・汽車を乗り継いで早朝、伊那北駅に着いた。登山者は多かった。ここから国鉄バスで登山口の戸台に向かう。

当時、バスは国鉄でやっていた。寒い朝、国鉄職員が我々登山者に「熱いお茶」を提供してくれた。いい時代であった。

14 名が戸台川を遡る。ドン詰まりが八丁坂。既に時計は、午後を指していた。重荷で八丁坂を上る。バテバテで北沢峠着。荷物は優に 30 キロあった。重い理由は、現在に比べ、兎に角、装備が重かった。



ザイルは、11 ミリ・40m。蛇のように太かった。カラビナが鉄製だった。ちなみに鉄製は約 140 g。ジュラルミンは、約 60 g で倍以上の違いがあった。

登山靴は革製で、靴の上にオーバー・シューズを履いた。ファスナーでなく、紐でたくし上げる。オーバー・シューズは、がさばって歩き難く、岩登りの場合、細かいフット・ホールドが拾い難かった。靴は、就寝時、新聞紙を入れてシュラフに入れた。それでも、朝はとても冷たかった。

オーバー・ズボン、ヤッケはビニロン製で濡れると凍った。ヘッドランプは、黄色のナショナル製で単一電池 3 本。さながら炭鉱夫だった。テントはビニロンで、内張りを付けた。内張りは、バリバリに凍った。

バーナーは、ラジューズ＝スエーデン・オブティマス（旧名・ラジューズ社製）燃料は石油。独特の音と炎の色に癒された。シュラフは、羽根毛でなく棉で温かくない。ピッケルは、勿論、ウッド製。時々、シャフトが折れた。



鉄製カラビナ



ラジュース（オプティマス）ネット

1月2日、摩利支天中央壁・右ルートに向かった。パーティーは、大村勝彦・渡辺吉美・後藤。3:00 北沢峠発。仙水峠から中央壁に向かう。南西稜肩 6:00。取り付き 10:00。この頃から吹雪が始まった。結果的に、この悪天候は、全国で未曾有の遭難を生んだ。

長兵衛バンド着 13:00、登攀終了 16:30。ビバークも考えたが帰幕を決意。ヘッドランプ行動。南西稜肩 19:30、仙水峠 21:00、B C 22:00 だった。この登攀で私も右足親指が凍傷になり、現在も痺れている。

その後も悪天候は続いた。剣岳では、大量遭難が発生した。静岡県の清水R C Cも犠牲者が出た。一連の遭難事故は、現在でも記憶に残る大きな事故だった。

剣岳周辺で相次ぎ遭難死（ネット）

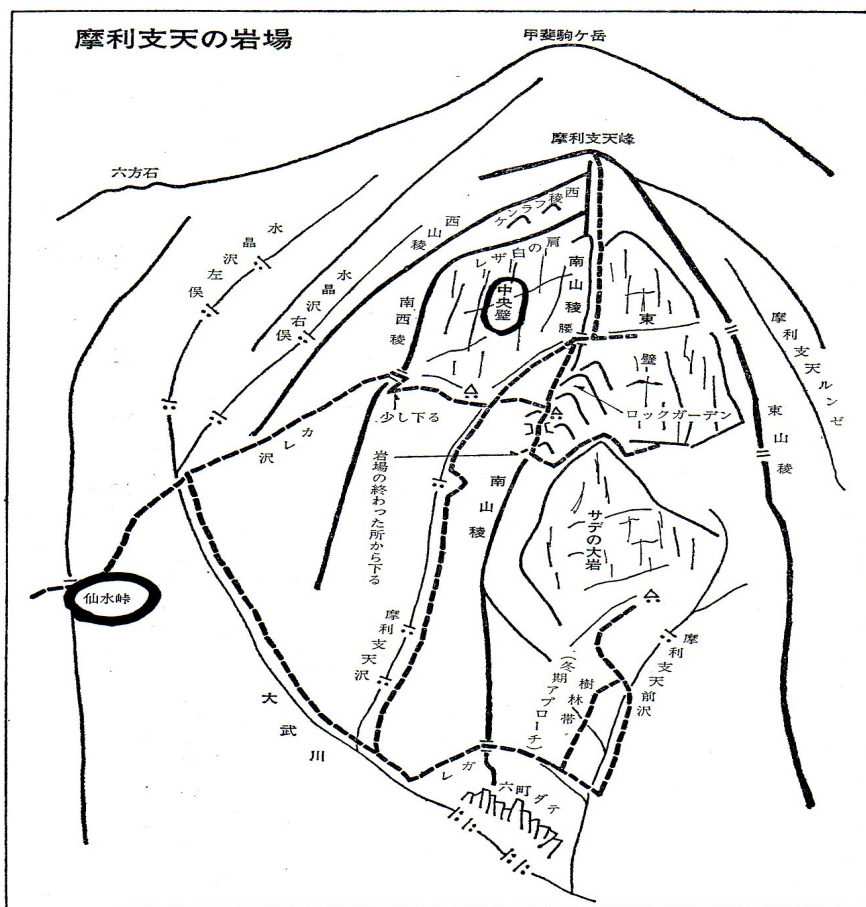
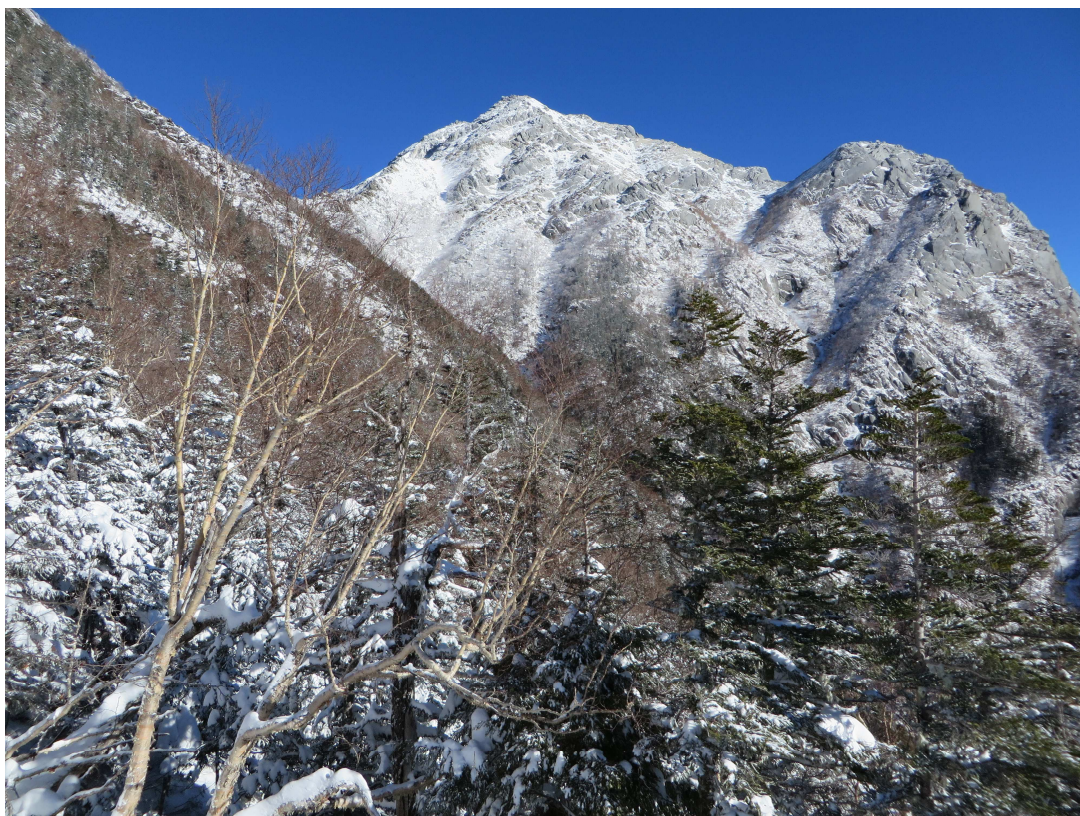
昭和 44 年（1969 年）1 月 11 日、搜索打ち切りとなった剣岳付近で起きた雪崩による相次ぐ遭難事故では 5 パーティー 18 人が犠牲となった。このうち最大の 8 人全員の犠牲者を出した東京都の葛飾山岳会は、小窓尾根から 1 月 2 日に下山予定だったが、奥大日尾根付近で遭難したものと思われた。

次いで 4 人の犠牲者を出した大阪府立大の 13 人のパーティーは、大明神山の尾根 1000m で 1 人が死亡。そして山頂に取り残された 6 人のうち 3 人が死亡した。日比谷高校山岳部 O B のパーティーは 3 人全員が昨 12 月 22 日に薬師岳に入山して 1 月 3 日までに下山せず、遭難したものと思われた。

清水 R C C の 2 人は剣岳早月尾根の 2800m の場所から東大谷側に滑落死。電電九州小窓隊の 5 人は剣岳頂上付近で 1 月 3 日、雪崩でテントが潰され 1 人が死亡した。

<https://www.youtube.com/watch?v=Rm7xMFwGxss> ・ ・ ・ ・ ・ 当時の中日ニュース（ネット）

1 日は休養で 4 日は、摩利支天・水晶沢に向かった。水晶沢は、右俣・左俣がある。



2017/12/28

日本登山体系・南ア



左・一番右が中央壁・右ルート

右・中央壁独標ルート（日本登山体系・南アルプス）から

右俣は、摩利支天・西山稜に沿って摩利支天に突き上げる。左俣は、甲斐駒山頂に至る沢。記録では、何方か不明だが、多分、左俣と思われる。「山と溪谷」1969年4月号に詳細が掲載されたが、本は処分したので詳細は分からない。

BC発 4:00-仙水峠 6:30-大滝 12:00-甲斐駒・摩利支天コル 14:00-BC 16:00。現在のような、進歩した氷壁登攀具はなく、厳しい山だった。

山靴のうた (2)

岩と雪の日記

治工具 後藤隆徳

第 I 章 甲斐駒・摩利支天壁

その年は風雪で明けた。山は我々が入山した時から荒れていた。二日午前二時起床。寒暖計はマイナス十六度を示す。ヘッドランプの光が一系列に光りながら仙水峠に向っていった。

一昨日から降りだした雪で仙水峠までのラッセルは深い。南西稜の肩から仰ぐ摩利支天壁は花崗岩の岩肌も白かったが所々についた雪がそれにも増して輝いていた。南西稜の肩よりアツプザイレで岩壁基部に着く。今にも落ちそうな雪稜を越え、南山稜、中央壁左ルートの連中と頂での再会を誓い別れる。我々はIV級のブツシユ混りの岩稜をへて取付に向う。やや傾斜のゆるい岩壁には新雪がべっとりついていていた。そしてそこは三人の男が胸に闘志の炎を燃やし立っていた。アンザイレレンし、僕のトツプで一P^ピツチ目の凹角を四〇米一バイ登る。風化した花崗岩は非常にデリケートで早くも苦しい登攀となる。二P目は、岩壁の途中に有るトンネルの上にまたがり確保。この頃より山は再び荒れはじめた。アサヨ峰がガスに巻かれガスの中に消えたかと思うと吹雪がはじまった。風雪は次第に強くなり、体温も次第に風に奪われていった。

Wとトツプを代りWは大バンドにづり上る。大ハングの下に集結しツエルトをかぶり暖をとりながら左ルートの連中を待つ。耳の奥に余韻を残し大きく風が渡る。今歩いてきたバンド上のトレースはもう消えていた。一時間待ったが左ルートの連中も南山稜の連中も現われなかった。心配なのでトランシーバーで呼びだす。なんどコールしても応答が無かった。時間が迫っていたので我々はツエルトを出て登攀を開始しようとしていた時、左手の雪田の中に人影が動くのが見えた。左ルートの連中だった。今日は、ここでビバークするので先に行ってくれとの事であった。南山稜の連中は解らなかつた。風雪は、さっきより一段と激しさを増していた。しかし、我々は出発しなければならなかつた。今日中に絶対この壁から抜けなければならなかつた。V級の悪いトラバースをWがトツプでいく。ザツクが大きく過ぎてそれが上につかえ非常に苦しうである。

やっと三人程立てるテラスに集結し、頭上のハーケン連打の壁にOが挑む。下でデヘルしている僕とWの手足の感覚はもうとくに無かつた。Oが少し時間がかかり過ぎていた。Oがかなり苦戦しているので僕が交代して大テラスに着く。そこから南西稜は目前であつた。最終ピツチの最悪のピツチも僕のトツプで入る。小さいバンドに雪がつままっている。悪い。ホールドが無いとさけんでも風で声にならなかつた。絶対墜ちてはならないと自分に言い聞かせる。最後には、どうにもならないので這っていく。ハングの全然効いていない頭のグラグラするハーケンにアブミをセットし抜けない様に祈り一気に乗越す。どうにかハーケンをもってくれた様だった。必死の思いで南西稜に抜ける。奈落の底よりこのコルへ目がけてくる風はものすごい。髪もヒゲも手も足もすべて凍ってしまった。

ハングに掛ったアブミが風雪に舞い上っている。もう夕闇はすぐそこまで迫っていた。忍耐と可能性の戦いは今終ろうとしていた。

甲斐駒ヶ岳摩利支天水晶沢右俣の印象

「舟が出るぞ」などの罵声に目をさます。チエ何が舟が出るゾだここは山だゾ。目をさましたのが、仲々起き様としない。時計をソツとのそくともう二時半である。ヤバイと思つたが早い、もう僕はシユラフから跳び出していた。なにせ冬山合宿で十四人もの大世帯なので朝食も大変である。何だかんだして結局出発は四時であつた。今日もあまり天気は良いとは言えず、風と雪が乱れていた。しかし、ぜひ行動したいという仲間もいて結局三人で水晶沢登攀に来てしまった。仙水峠からトラバースし出合いに立つた我々はツエルトに入り暖を取る。ミジ豆を暖めて食べたり、タバコをふかしたりし、三人の瞳はやる気で、まるで水に光るレモンの様にキラリと輝いている。東の空がボーッとしてきた頃、三人はツエルトから這いだし水晶沢に入る。雪はかなり深く股までのラッセルである。B1から滝は完全に氷瀑と化して何んとも言えぬ美しさで朝日に光っている。冬独得の弱々しい朝の日光がそこにあふれ、冬山としてはまず超上級の天気になっていた。

B2は十米位の滝であるがやはり氷瀑である。ノンザイルで僕がトップで登りだす。三米位ステップを切つて登つたがどうもステップ切りは重労働なので右手に有る岩場を登ろうと思ひ足を横にした瞬間僕は「アツ」と小声を上げた。

尻を下にして、ちょうど滑台を滑る様な格好で下まで氷の上を滑り落ちてしまった。下でそれを見ていた友人は大声をあげ両手を打ちながら大笑いしていた。やがて行手に二段になった八〇米のみごとな滝が僕達を待っていた。あの半透明のブルーの氷の色は

僕達の登攀意欲をかきたてるものがある。

友人がトップで「まかしとけ」と行つて登りだす。ガリ／＼とアゼンのきしむ音。ブルーの上下のヤツケ。真赤なザイルに真蒼の空。ピツケルを振るごとに飛びかう氷片。こちらからジツヘルし、いて思わすタメ息の出る様な光景であり、今や登攀はクライマックスに達していた。最後の滝も時間の都合で捲く。ラッセルはひどいし、時間には追われるし、足は進まないし、腹は減るし苦しかった。跳ばしに跳ばして駒と摩利支天の鞍部に着いたのは十四時だっただろうか。向う側には赤石沢奥壁が険悪な表情でそそり立っていた。駒ヶ岳直下でトラバースを開始し気持の良い尾根を跳ばす。右手にはいつか歩いたノコギリの稜線がギザ／＼に見える。とばしにとばしてB6に着いたのは十六時を回っていた。途中会長が笑顔で迎えてくれた。

今考えてもあの水晶沢は僕の心の中にいつまでも残っている印象の深い沢だったと考える。

おわりに

まだ山をはじめて年の浅い僕だが何か一つの一里塚みたいな気持ちで、また何か一つの追憶として今まで歩いて来た道をザツとたどってみた。本当は、ただ滑ったころんだのの紀行文でなくて、もう少し別の物を書きたかったのですが。

1969 年（昭和 44 年）

世相＝東大安田講堂、沖縄返還決定、フォークブーム、永山事件、東名全線開通、
水俣訴訟、アポロ月面着陸、ホーチミン死去、金田正一 400 勝

流行歌＝夜明けのスカット、港町ブルース、ブルーライト横浜、恋の季節

山行 NO. 0064 1969/04/29～5/5（昭和 44 年） ハヶ岳・春山合宿

年末・年始は、入会した北嶺登山会で甲斐駒・仙丈ヶ岳に上った。初めての冬山合宿・冬山登攀でそれなりの成果はあった。春が巡り、暖かくなり、初めてのハヶ岳に入った。

残雪のハヶ岳の美しさに感動した。天気のも恵まれ、小同心クラック・赤岳ショルダー・阿弥陀岳北西稜・横岳南稜など登攀した。記録は、山溪 10 月号に掲載。



バック・阿弥陀岳

後列左から、？・？・池田・後藤・加藤

前列左から、渡辺吉美・芹沢・大村勝彦・後藤育三・山本角男



赤岳



場所・？

後列・渡辺吉美、？、池田、芹沢、？、佐藤文男
前列左・後藤育三、山本角男、後藤隆徳、加藤

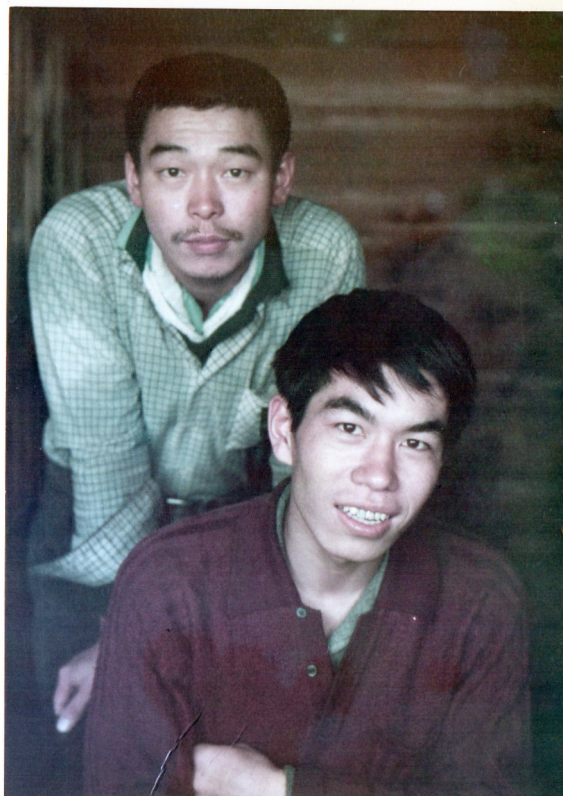


後列、勝亦久・後藤・瀬戸敬三（1972年富士山大量遭難事故で遭難死）・佐藤文男
中列、渡辺吉美、芹沢、加藤、村岡博
前列、池田・大村勝彦・渡辺（？）

山行 NO. 0073 1969/07/29～08/03 北ア・北穂高岳滝谷 クラック尾根・第一尾根
後藤・渡辺吉美・村岡博・佐藤文男



北穂・南稜



渡辺吉美

山行 NO. 0077 1969/09/13～16 北ア＝前穂高岳・北尾根四峰正面北条・新村ルート
後藤・渡辺吉美



ネット

山行 NO. 0082 1969/11/01～03 南ア＝前穂高岳・北岳バットレス 第四尾根～中央稜



大樺沢

後列、村岡博・山本角男 前列、渡辺吉美・後藤

第Ⅱ章 北穂高岳・滝谷

相変わらず外は重そうなガスが充滿していた。三人の目が合った時登ろうとお互いに決心した様だった。MとSに小屋で待機している様に言い残し三人はガスの中に消えた。急激なB沢を下降してやや悪いトラバースをして第一尾根取付に向う。霧の中に第一尾根の影が写っている。歩きながら、この第一尾根を登ってやろうと思ったのは一体いつごろだったのだろうかなどと考えていた。あれは確か四年位前だっただろう。先輩のI氏の登攀記を読んで若かった由非常に感激もし、自分もいつかきつと、とあの時思ったのが最初だと思った。それが今実現しようとしていた。それにしても天気が悪かった。霧というか、雨というか、いわゆる霧シオンという奴が飛騨側から容赦なく吹上げていた。僕のトツブで四〇米やさしいバンドをトラバースして凹角の下に着く。

Wが凹角を登り、オフエースの難所。チョック、ストンハンク下に着く。Wに是非トツブをやらせてくれと頼みハンクに挑む。僕が期待していた通りこのハンクは、アブミ無しで乗越すには、やや困難であったが、困難な程、面白いのでありやりがいもあった。ハーケンにカラビナを掛け強引にアブミなしで乗越す。以外と快適だった。下のテラスではWが大声で「ヤッタツ」などいっていた。Bフエースの難所ピナクルへのトラバースはWが先行。いつか山溪に載っていた写真のポーズを真似して彼は笑っている。それにしてもすごい風雨と寒さである。Wののばすザイルが宙に舞う。そして夏の滝谷がこんなに寒いとも知らなかった。Aフエースのやさしい凹角を二P登り北穂高岳の頂上に着く。Wと握手。四年間の夢よ万才。無性にタバコが欲しかった。

小屋では、ヌクヌクとMとSが漫画でも読んでいるだろう。霧は一層深くなっていた。

第Ⅲ章 前穂高岳・北尾根四峰

正式には、前穂高岳北尾根第四峰奥又白谷側正面新村、北条ルートと実に長い名前と呼ばれるこの岩壁をWと二人でタバコをふかしながら又白ノ池よりながめていた。四峰は夕日を浴びて黄金に輝いていた。Wが四峰には歴史が有るといった。先人の残した苦難と青春の歴史か。情熱のクライマー新村正一氏の初登攀。

壮烈な芳野、加藤らの積雪期初登攀。なぜ山に登り、岩を攀じるか？。この愚問とも難問ともつかない間に我々はどういう風に答えたいのだろうか？ 汗を流すのに山が一番適しているからですと答えたのは、加藤文太郎氏だと思ったが、ただそれだけでも無いと思う。いつか巨人の胸を思わせる四峰は夕闇の中に染っていた。翌日は、すばらしい秋晴れの中を取付に急ぐ。二P半でハイマツテラスに着く。その名の通り太いハイマツが生えている。蒼い空はどこまでも澄み絶好の登攀日和であった。梓川が白蛇の様に見える。ハイマツテラスより新村ルートの核心部の三段になったハンク帯に挑む。やさしそうなハンクに見えたが、いざ登ってみると以外と手強いのに驚く。初登攀者の新村氏はここをハーケン無しで登ったと聞くが信じがたい位である。ハンクを越え快適なスラブをトラバースしてピナクルテラスに着く。正面には噪や常念の山波が流れる。ややもすると城山か、鷲頭山のゲレンデでも登っている様を錯覚を起す様な実に快適な登攀。

Wがピナクルテラスよりトツブで悪いトラバースを終え、やさしい岩稜を二P登り登攀終了。ここまできてようやく四、五峰間に槍の穂先が見えてきた。北尾根の縦走路に出て穂高の大展望をタバコをふかしながらか心ゆくまで楽しむ。涸沢には、もうあの夏のような数の天幕は無かった。穂高も雪がみな落ちて少しやつれて見える。ザイルを背にした若者がコンチワーーといって通りすぎた。二人にとっては、かけがえの無い穂高の休日であった。

1970 年（昭和 45 年）

世相＝国産初人工衛星・万博・よど号事件・日本隊エベレスト登頂・プロ野球黒い霧
事件・東京歩行者天国・巨人六連覇・三島由紀夫割腹自殺

流行歌＝あなた、22 歳の別れ、酒と泪と男と女、コーヒーショップで、学生街の
茶店、あの素晴らしい愛をもう一度、出発の歌、ひこうき雲

山行 NO. 0089 1969/12/28～1970/01/05（昭和 45 年） 八ヶ岳・冬山合宿

大同心正面雲稜ルート 後藤・渡辺吉美

阿弥陀岳・北西稜フランケ初登（山溪 12 月号掲載）後藤・渡辺・山本角男

第 IV 章

横 岳 ・ 大 同 心 壁



2018/01/19・大同心

まだ夜の明けきらないこの大同心稜の急登にはいささか疲れていた。しばらく歩くと樹林の間の空は半分が夜で半分が朝に変わっていった。背後には、赤岳の偉容が、そして阿彌 岳がまばゆいばかりに輝いている。寒暖計はマイナス十五度であるが、汗が吹き出す。見上げる大同心壁はいく分雪をつけている程度で黒々としてそそり立っていた。大同心の基部にて陽が上がるのをツエルトの中で待つ。フオエーブスの炎は我々の心の中をも暖めてくれる。八時、ツエルトを畳みアタック開始。ツエルトを出ると寒さ

がものすごい。指先がしびれる。取付まで大同心壁の基部を少し廻り込み W のトップで登りだす。デヘルする僕の指は全然感覚がなくザイルが良く握れない。W がアイゼンを軋ませながら悪い壁をジワジワと登っていく。W はハンギを上手に乗り越しⅡ（ティワン）に着き、登っていいぞと合図を送ってきた。二 P 目は僕のトップで快適なスラブを人工登攀で登る。どうも両手中指がおかしい。三 P 目も悪いフリークライム。もう冬の大同心を登っているゾなどという高慢な気持はどこかにいつてしまった。今はもう堅くない様に努力するだけだった。調子はすこぶる悪く非常に怖い。一年に一度か二度は必ずこういう時がある。かぶり気味の壁で指に力が入らないので余計そういう風に感じたのだろう。時々思う、なぜ僕達は好き好んでこんな所を岩などを攀じっているのだろうか。心の迷いは行動にも迷いを生じさせる。一般に山が好きだと言って一年に数回の山行を実行し山はすばらしい等、言っている人間の大半はハイカーだ。ハイカー達には困難の追求などという項目は無い。僕達は逆に困難性の無い山行などは意味が無い様に思う。困難は、それを克服することに意義がある。精神的なものが充実してないとその困難は打破しにくい。常に山をみつめているその姿勢が大切である。又、それでこそ本当の姿なのではないだろうか。氷のビッシリ付いた悪い草付のトラバースを終えて最終ピッチに入る。さっきまで、あんなに快く蒼かった空もいつしかガスに染って目の前の小同心も隠れてしまった。ただ小同心を登るパーティーの声だけが霧の中から響く。W を確保している時大同心ルンゼより二人登ってきて「寒いスネ」といって登っていった。最終ピッチはセコンドで登る。赤岳鉱泉より吹上げる風はものすごい。アプミの上でモタモタしているとふっ飛ばれそうだし、最後やさしい岩稜を登って終了。W と堅い握手。大同心はおちた。中山乗越にて見上げた大同心はガスの中にあった。

第Ⅶ章

北西稜フランケ

前々からどんな小さな壁でも良いから自分達の手でルートを決め、そして自分達の手でルートを開拓していく初登攀にもすごい願望があった。既成のルートには無い困難性を求める人間本来のごく健康的な欲望でもあった。昨年、甲斐駒摩利支天壁に敗退してからというもの心の内でくすぶっていた果題でもあった。

大きい壁という壁は全部登りつくされてしまった現在の日本の山ではそれを考えるのは少し無理な事かもしれないのではないかと時々迷いも感じたが今冬その願望も一応叶えられ非常に幸福であると思う。当初考えていたグレード、スケールともかなり充実したルートが出来た事もラッキーであった。……最初、皆でここをやろうと論議した事が確かあった。などと考えながら



1月の行者小屋



2018/01/19 阿弥陀岳＝右のラインが北西稜・陽が当たっている場所がフランケ

重いザックを背にして深いラッセルと戦っていた。偵察なしのルート開拓なので一体どの位のスケールがあるのか見当がつかなかった。そういえばいつかWとこのルートの事で議論の末けんかになってしまったっけなどと歩きながら考えていた。今にも落ちてきそうな雪に注意しながらの登行だ。確か一昨年だかここで雪崩があり、事故があったはずだ。二千五百米付近にA C用のツェルトを設置し、右稜より下降して大滝基部にボルト数本打って百十米のザイルを急激なA沢にフイックスする。以外と時間を喰い十五時を廻ったので今日は終了にし帰幕する。僕とYはここで今晩ビバーク。W、M、SはB Cに手を振りながら下っていった。A Cより見上げる فرانケは黒々としている。翌朝Wが上ってきたのと同時にA沢をつめて大滝よりアタック。Yのトップ。しばらく登って僕と交代して脆い壁にハーケンの連打で大滝をぬける。大滝上はちよつと傾斜のおちるスラブなので雪がものすごく付いていて雪を落すのが大変だ。天気は昨日より恵まれているが壁が真北なので一日中全く陽光が無くとにかく寒くてやり切れない。大滝上の人工テラスからWがボルト、ハーケンの連打で四〇米一杯伸し一人用テラスに着く。以外と時間が掛った。もう十四時である。一人用テラスに今にも落ちそうになりながら三人集結して明日の作戦を練る。壁に記念プレートを打ちつけて今日は終了。登攀用具の荷上げの為に今日はB Cに下る。翌朝、登攀用具を背にしてA C入りし、昨日の最高到達点まで一気に登る。Tより垂壁はボルトで越え、草付をトラバースして又垂壁に当る。行者B Cに後発隊が到着したらしく冬テンの回りに皆こしかけてこちらを見ているのが良く解る。ここから見る人間なんてケチなものだ

と三人で笑う。ここから見るフランケはものすごくまるで滝谷の中にいる様な錯覚を起す。Wはボルト、ハーケン連打でアイゼンをガリガリさせながら三時間かかってここをようやくぬける。もう時間も遅く帰るかと思案したが残す所四〇米なので続行する。今日は一月一日だがんばろう。最後の完全な一枚岩に僕のトップで挑む。一本、二本、時間も寒さも忘れてボルト工作に専念する。Tでは彼らが寒くてしかたがないので早くしろなどと怒鳴っている。この辺はものすごい高度感でA Cのテントがマッチ箱のように雪の中にポツンと立っている。壁がかぶっているためか背中に空間を感じる。もう空に赤っぽい色が漂っていた。このピッチだけでどの位のボルトを打っただろうか。十七本目のボルトを打ち終え、大きく深呼吸して最後のアブミをセツトしておもむろに北西稜にとび出る。十六時二十五分。丁度陽が沈む直前で夕焼けが美しかった。稜に出たとたんものすごい強風にあおられ体温は急激に下っていく。だがそこからはもう前をさえぎる物は無かった。終わったのだ。三日間の戦いが。穴の明いた手袋からは容赦なく風が入る。朝からロクに物を食べていない腹は減っていた。みじめだった。Wが登り、Yが登り終えた時にはもう真暗で何もみえなかった。ただ遠くで茅野の一月一日の暖く平和な家庭の灯だけが涙の中にゆれていた。

一九七〇年四月二十二日

完



山行 NO. 0103 1970/04/30～05/05 春山合宿（屏風岩で墜落目撃でビビった）
北ア・屏風岩東稜（後藤・村岡）、槍ヶ岳（小川洋子・和泉）



左から、小川・後藤・村岡



槍沢



槍ヶ岳山頂



東のナメ沢？

- 山行 NO. 0108 1970/06/05～07 奥秩父・笛吹川東沢・釜ノ沢～甲武信岳 後藤・小川
この頃、小川とよく山に行ったが・・・。
- 山行 NO. 0111 1970/07/10～12 南ア・黒桂河内
後藤・村岡・小野・ほか1名・・・2名骨折事故
- 山行 NO. 0113 1970/08/12～/17 北ア・北穂高岳滝谷・第四尾根 後藤・小川
涸沢でテント泊
- 山行 NO. 0117 1970/09/30～10/03 南ア・仙丈ヶ岳～塩見岳（単独）
/02 仙丈ヶ岳 6:35-北荒川岳 16:30 /03 塩見岳 7:45
- 山行 NO. 0119 1970/10/30～11/02 南ア・茶臼岳～光岳（単独）
/02 茶臼小屋 5:25-光岳 10:00-千頭 18:20-金谷 19:44
- 山行 NO. 0124 1970/12/30～1971/01/01（昭和46年） 南ア・仙丈ヶ岳（単独）
この頃、「北嶺登山会」を退会し、「沼津山の会」に入会した。会長は、富士市・大昭和製紙の黒沢義一。何処で知り合ったかハッキリしない。例会は、沼津・小菅氏の家？だった

1971 年（昭和 46 年）

世相＝ボーリングブーム、NHK 全カラー放送、カップヌードル、全日空・自衛隊機
零石上空で衝突、成田強制代執行、大鵬引退

流行歌＝また会う日まで、わたしの城下町、さらば恋人、花嫁、おふくろさん、知
床旅情、17 歳、雨の御堂筋、走れコータロー

山行 NO. 0125 1971/01/14～17 奥秩父・乾徳山～黒金山（単独）

今はない、不動小屋。二階で最後に就寝。フツと屋根を見ると、ストーブ
の煙突周りからの火事を発見。素足で雪の屋根に上り消火活動をした

山行 NO. 0127 1971/02/04～06 ハヶ岳・唐沢鉱泉～醤油樽～硫黄岳～赤岳鉱泉 稲木英一
醤油樽氷瀑を目指したが、達成できなかった

山行 NO. 0128 1971/02/20～21 富士山・宝永山第一火口第三岩稜（山溪 6 月号掲載）
小菅守司

山行 NO. 0132 1971/04/30～5/5 南ア・北岳バットレス 第四尾根、第一尾根
後藤・黒沢義一・鈴木正・小岱・東正秋
四尾根は氷で怖かった、一尾根は快適だった

山行 NO. 0134 1971/06/11～13 南ア・甲斐駒ヶ岳黄蓮谷 清水准一

山行 NO. 0138 1971/07/10～11 上越・蓬峠～谷川岳（単独）

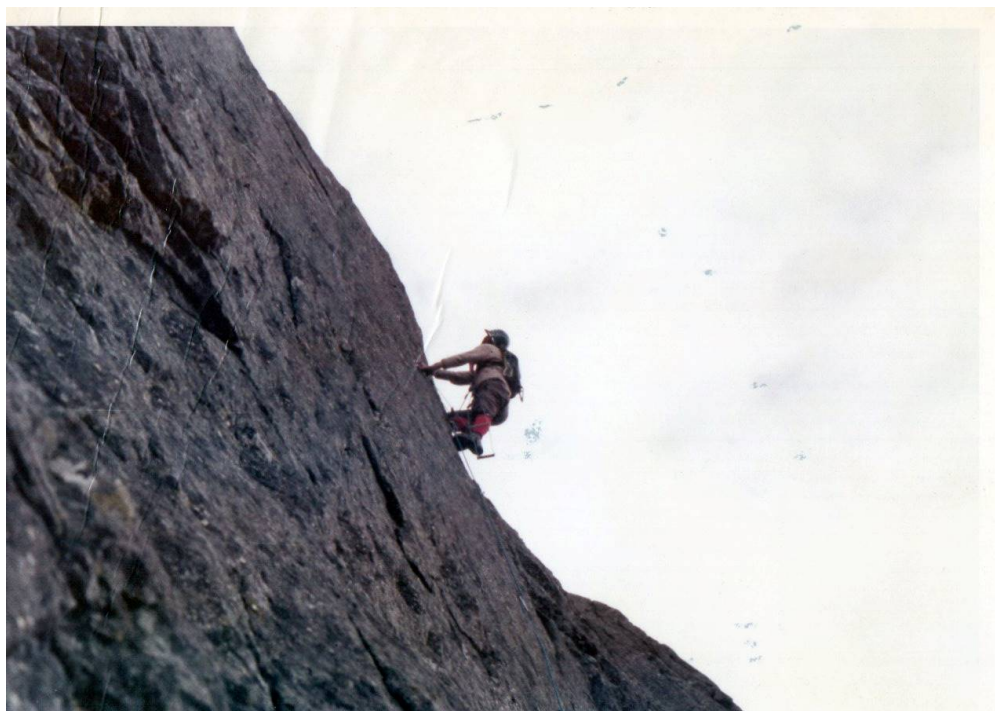
山行 NO. 0140 1971/08/07～09 南ア・北岳バットレス＝D ガリー大滝～下部フランケ～第
四尾根 稲木英一

山行 NO. 0141 1971/08/14～19 北ア・北鎌尾根～槍～北穂滝谷～奥穂～岳沢
後藤・鈴木正・稲木英一・東正秋・清水准一・黒沢義一・
西堀高行



北穂高岳山頂

左から、 稲木・西堀・後藤



滝谷・ドーム正面壁（人物・後藤）



北穂高岳山頂

後列、西堀・鈴木・後藤

前列、清水・稲木・東

山靴のうた (4)

―岩・雪・アルプス―

マグ 後藤隆徳

北岳バットレスDガリー大滝、四尾根下部フラニケ、四尾根登攀

北岳バットレスは北岳のその東面に日本にも数少ないバットレスを形成している。本邦第2の高峰北岳（三千百九十二米）の頂稜から大樺沢に一気に五〇〇米の落差を誇りその各稜が登攀対象となるのであるが、とりわけ第一尾根、中央稜、第四尾根は岩も硬くすばらしい登攀が満喫できる。

私とパートナー稲木英一は汗を流しながら大樺沢を登る。二俣を過ぎD下沢に入りDガリー大滝めざす。この前、と云っても三ヶ月前だがこの辺はまだ残雪が多く雪の急斜面であったのに今日はその荒々しい岩壁とは対象的にお花畑が美しい。Dガリー大滝着九時半。天候はまずまず。十時Iとアンザイレンして私のトップで登りだす。大滝は左側を登るのであるが取付からハング気味であり気分はよろしくない。2P目は草付でこれ又あまりスキリとはしない。しかし、天気は安定しているし体の調子も良好

の様だ。のんびり行こう。大滝を二P^{ピッチ}八〇米で終る。すると緩傾斜の草付となるのでIを引き上げコンテナスで下部フラニケの取付に急ぐ。下部ラニケには一パーティー取付いており三〇分程待たされ草付の上に横になっていたら眠くなってしまった。先行パーティーのセカンドはあまり登攀が上手とは云えず下で見ていてじれったい位だ。Iと二人で下からアドバンスするがあまり効果は無さそうである。

十一時いよいよ私達の番だ。

三P目はまず三〇米のスラグからであるが、ここから高度感がグッと出るし抜けてバンドに立つ所が悪い様である。「頼むぞ」と、Iに声を掛けて登りだす。先程のセカンドが苦勞していた所は指先に僅に掛るホールドを利用し二気に上る。岩登りはリズムと思い切りの良さだ。二〇センチのバンドに立ちNを上げる。Iは「どうと云う所ではないな」などと言いながら上ってきた。四P目は凹角とハングで三十五米だ。今度はNがトップで行きたいとの事。トップは彼に譲る。赤と青の九ミリの二本のザイルは軽快に伸る。途中のハングだろうか「悪いな」などと風に乗った。彼の声が頭の上でする。「登って良いゾ」の声があったので「いくぞ」といって私も登りだす。ハングの所でアフリミが終り少々登りにくかった。この頃ガスがぼちぼち上ってきて、陽光もどこかに消えうせた。五P目はやはりハングと凹角の四〇米だ。私がトップで行く。ハングで少し体力を消耗し、いささか疲れが出てきた。昨夜は広河原のロッジの階段の下で寝たので休まらなかったのだらうか「危険だな」とつぶやく。しかしそれが山なのだ。危険でも登る。畏はどこかに口を広げてまっているのか。―危険を甘受し

なければ真のアルピニズムは存在しない。危険を冒すのでなければ、困難なピッチを突破し、目がくらみそうな永壁を登り、大岩壁に登攀する楽しみはどこにあるのだろうか？スリッパしたら鳥の様に翼をはばたいて飛び立ち虚空からのがれることが出来るのだとすれば、楽しさはないはずなのだ意識していようが、いまいが、アルピニストは危険を冒すことが好きな人種である。もともとこれは計算された賭である。なぜならば真の楽しみは危険を堪え忍ぶことでなくこれを支配することにあるのだから。しかし、豊富な経験と最良の準備さえあれば登山の危険は完全にのぞくことが出来るなどと思ひ込むことは空中楼阁を描くのに等しい。アルピニズムは、明らかに危険なスポーツである。——ルネ・ドメジーン。ハングを越えると三〇米のフェースが私達を待っていた。別に特長の無い様なフェースであるが傾斜が強くルートファイティングがむずかしそうだ。

Iが慎重に登り出す。ルートが右に左にいくのでIはザイルが流れず苦しそうだ。「ザイルアップ」が怒鳴る。岩壁で大声を出すとは以外と落着くものである。彼はむずかしいフェースを越えた。私も後に続く足の下をのぞくと虚空へ吸い込まれそうだ。こういう悪い所はあまりキョロ／＼せず登る事に専念することだ。七P目は一〇センチ程のバンドのトラバース。これを終れば四尾根に出る。一〇米先の真中がむずかしく腹の出ている奴にはちよつとイヤな所だろう。私はこれを越し四尾根に出る。四尾根に出た所で昼食にする。喉がカラカラだ。四尾根での最終の十一P目を登っている所で雨が降り出した。すぐ左のDガリー奥壁では悪戦苦闘している。「がんばれよ」とコールして私達はお花畑の中を稜

線に急いだ。北岳頂上着十五時半。長い登攀だった。私とIは疲れた体をひきづって下山にかかった。今夜は大樺沢でビバークだ

北穂高岳滝谷ドーム正面壁登攀

数多い滝谷の岩壁の中でも真に壁を感じさせるドーム正面壁。私の長年の夢はこの日実現した。昨夜は南稜で歌い・飲み・騒ぎ過ぎた為か朝四時に起きたが、まだ頭がボーッとしていた。まあそんなのも今だけで滝谷の風にでも当ればシャキッとするだろう。パートナーの稲木・西堀もあまり爽やかな顔はしていない。簡単な朝食をとり四時半南稜を出発。第一尾根、四尾根に行くパーティーと別れ、我々は取付に急ぐ。まだ滝谷は井戸の底の様に暗い。取付で夜明けを待つ。蓑を吸う。冷たい風が気持ちよく気持ちも落着いているので今日も良い登攀が出来るであろう。

五時四十分私のトップでアタック。一P目四〇米は垂直な凹角から始まる。下部二〇米はおおまかなホールド・スタンスであったが登るにつれて壁の角度は増し、凹角も除々にせまくなり最後には右の壁に打ち残してあった。ピトンにアブミをかけ壁の登攀となる。何か体が非常に重く感じられてきた。今日で入山四日目なので疲れが出たのだろうか？肩で呼吸をしなければ苦しい。今日は三人なので時間も掛るだろう。それだけ休む時間も長くなるので少しは楽になるか。二P目は草付バンドをコンテナアスで登り三P目四〇米の凹角にNのトップで入る。今日も良い天気である。過去三年間滝谷に通っているが、こんな良い天気には恵まれた

のは初めてである。四P目はこのルートの関門である。私のトップで登りだす。テラスからいきなり人工登攀でアブミの掛かえで登り出す。登るにつれて壁は徐々に垂直になって行く様な気がする。時々半分位しかリスに入っていないハーケンが有るが静かに静かに登り、すばやくその上のピトンにカラビナを入れて、ホットする。下でぼんぼんとNがジーと見ている。高度感はずばらしい。ぼちぼちと滝谷にもクライユエーやってきたらしく各壁に元気の良い掛声が響く。

三〇米登り不安定に石がつまった洞穴状のテラスに着く。三人を上げて五P目も私のトップで登り出す。でだしが少々悪いアブミトラバースが終えるとフリーで凹角に入る。二〇米を快適に登り登攀終了点のドームの頭に出る。IとNを上げドームの頭にて記念写真を取る。まだ八時四十分だ。三人にしては仲々良いタイムだ。天気は相変わらず気持良く晴れていた。

前穂高岳東壁Dフェイス田山ルート登攀

雨はすでに上高地から降っていた。入山の時雨が降っていると、いうことは実にイヤなものだ。雨にけむる穂高も気韻であるのだ。奥又白池畔にツエルトを張り明日の天気を心配する。翌日は雨が少し降っていたがかわまず四峰に向ったものの取付でどしゃぶりになったので登攀は断念し、ふてくさって帰幕する。明日少しでも降ったら帰るとSに伝え雨にべとべとにぬれたシュラフにもぐる。それでも夜になったら雨もやみ雲もちぎれ、星が輝き始めた

ではないか。山で天候に恵まれることは幸せな事だ。これ以上のぜい沢はない。山で若い命が毎年多く消えて行くのもほとんどが天候である。

翌日、私とSは三時に起床した。外はまばゆいばかりの星である。四時池畔を出てB沢に向う。B沢の都合にいたがまだ暗く頭上にはオリオン座が輝いている。B沢は暗くては少々悪いので夜明けを待つ。常念の頭が明るくなった頃再び出発してDウェース基部着六時。Dフェイスも前々から登りたいと思っていた壁であったがようやく今日実現するかもしれない。終つてみないと解らないがDフェイスは悪いぞ、とパートナーの清水にもうながす。私のトップで取付開始六時十分。取付はB沢のどんづまりから草付のバンドを三〇米右斜上するとDフェイスを特徴づける二〇米のスラブに出る。このスラブは全く快適である。B沢をぼちぼち下からクライマーが登ってきたので落石は禁物である。私のトップで一P三〇米二P目スラグ三〇米とのばしテラスで軽く休憩水がうまい。三P目はこの壁最悪のピッチだがまだ若いSがトップで行くというので行かせる。

Sが三P目を開始して頭上のコブの上に消えた時ちょうど今日Dフェイス第二番目のパーティーが取付く所であった。トップのSは「Gさん悪い悪い」と、ぼやいている。私はここから見た範囲ではそう悪く見えないので「早く登れー」と、どなる。Sは悪戦苦闘してどうにか洞穴テラスについたらしい。「登って良いよ」とコールしてきた。取付からハーケン連打のアブミの掛かえで私はおもむろに一本目のハーケンに乗った時、落石の音とともに下の方でズシーンというものすごい音がB沢に響いた。私ははっと



して下を見た時下から登ってきたパーティーのトップが二P目のスラグの所で落ちてドッベルのザイルに足がひっかかり宙づりになってしまった。墜落者のザックはすごい音でB沢を一気にゴロゴロと石とともにころがり落ちて行く。「ハーケンでも抜けたかな？」と、私は思った。救助に行きたいがここからではどうすることも出来ないのではばらくは同胞の墜落は見るに耐えない。もしハーケンが抜けたとしたら私達は運が良かった。七〇キロ級が二人も乗ったのでゆるんだかなどと一人苦笑する。三P目のこのピッチハング気味で悪く、さっきの事も有りものすごく慎重に登る。赤いボロボロの壁に打たれたピトンが今にも抜けるのではないかと、などと実に心配だ。

Sの所まで来てさっきの話はSにはせず私はそのまま四P目を登り出す。ボロボロの草付まじりの壁を四〇米登り北尾根一・二峰間のリニネに出る。Sをリニネの中でもう一Pのばしザイルを解き、リニネに登り、北尾根に出て前穂高岳の頂稜に立ち快活を叫ぶ。富士が見える程良い天気だった。そして、山は紅葉が始まろうとしていた。

一九七一年六月二十九日 完

国産電機労組・青年部機関誌「窓」第9号 1972/08（昭和47年）発行

山行 NO. 0144 1971/09/22～26 北ア・前穂高岳北尾根 四峰正面松高ルート～D フェース
田山ルート 清水准一



奥又白池

山行 NO. 0145 1971/10/29～30 南ア・北岳 冬山荷上げ
 後藤・稲木・西堀・東・清水・福田
 山行 NO. 0148 1971/11/20～22 上越・土樽～茂倉岳～谷川岳（泊）～天神平 清水准一
 山行 NO. 0149 1971/12/30～1/2 南ア・北岳 後藤・清水・西堀・東



右・清水准一



1972 年（昭和 47 年）

世相＝富士山・雪崩大量遭難事故、沖縄返還、パンダ来日、札幌冬季オリンピック、
 田中内閣、日中国交回復、横井さん帰還、浅間山荘事件、ウオーターゲート事
 件、千日デパート火災

流行歌＝女のみち、瀬戸の花嫁、さよならをするために、旅の宿、悪魔がにくい、
 ひとりじゃないの、京都のにわか雨、別れの朝、雨の御堂筋

参考 1972/03/19～20 富士山・雪崩大量遭難事故

富士山・雪崩大量遭難事故とは・・・

1972 年 3 月 19 日夜半から 3 月 20 日にかけて低気圧の襲来によって発生した悪天候に見舞われ、富士山御殿場ルートを下山中の登山者が低体温症や雪崩により 18 人死亡、6 人が行方不明となった事故である。八甲田雪中行軍遭難事件など軍隊の訓練を別とした日本の登山史

上としては最悪の大惨事となった・・・ネット

3月19日

連休を利用し、3月19日には7つのグループと4人の単独行者合わせて55人が入山していた。このうち静岡頂山岳会の9名はヒマラヤ遠征の訓練として雪上訓練を行ったうえ、宝永噴火口の200m下でテントを張り野営を行っていた。

一方、18人で入山した清水勤労者山岳会は冬山の経験に富んだ7人が山頂に向かい、残る11人は五合目付近にテントを構え雪上訓練を行い就寝した。この日は午前中は快晴だったが、静岡頂山岳会が訓練を終えたころから天候が急変、霧が立ち込め強風も吹き始めた。全員が寝袋に入ったところにはみぞれに変わり、テント内や寝袋に水がしみ込む状況となった。

3月20日

静岡頂山岳会は午前3時には9人全員が起き上がり、訓練の継続か中止を話し合ったが結局下山に決定。午前7時半に下山を開始したが、寒さと睡眠不足からくる不調から朝食を抜いたままの行動となり、下山を開始してから20分ほどで最初の1人が倒れたのを皮切りに次々と低体温症に陥って行動不能になった。最終的に2人だけが下山し救援を要請した。

五合目付近で野営していた清水勤労者山岳会の11人はみぞれ交じりの吹雪によりテントが埋まり除雪も間に合わなくなったため山小屋に避難したが、小屋にも雪が吹き込んだうえ燃料も残り少なくなったため、吹雪の弱まった頃合いを見て三島市の単独行の男性1人と合わせた12人で下山を開始した。

下山を開始してから1時間半ほどで1人が低体温症で倒れ、これを寝袋に収容して下山を継続したものの四合目付近に着いたところに6人が次々と衰弱して倒れ昏睡状態となった。残る5人のうち2人が濃霧の中ではぐれたため残る3人で下山を続けたが、二合五勺付近で仮眠中に今度は二度の雪崩に襲われて埋まり、脱出できた1人だけが御殿場署にたどり着き救援を求めた。

3月21日

救助要請を受けた静岡県警、静岡山岳会が救助隊を準備、静岡頂山岳会、清水勤労者山岳会、御殿場消防署や市役所が加わり150人の救助隊が編成され、陸上自衛隊富士学校からもレンジャー部隊など100人が派遣され救助に加わった。

濃霧と目まぐるしく変わる天候に搜索は難航したが、同日の搜索により日産車体に勤務する登山パーティのうち2名と豊川市の3人のパーティを救助、大阪からやってきた単独行の男性の遺体を収容した。

同じく入山していた東京おいらくの会、京都岳友会は山小屋に待機していたため全員無事に下山した。清水勤労者山岳会のうち山頂に向かった7人も二合五勺の山小屋から下山するところの確認され、19日から20日にかけては八合目の山小屋に待機していたことが明らかになった。

最終的に多数の犠牲者を出した二つのグループのほかに日産車体に勤務する登山パーティ 4 人中 1 人が死亡、1 人が行方不明となった。

ほか、平塚登高会の 1 人が行方不明、大阪の単独行の 1 人が死亡、横浜市の単独行の 1 人が行方不明、身元不明の単独行者 1 人の遺体が発見され、計 18 人の遺体が収容、残る 6 人が行方不明とされた。

遺体が発見されなかった 6 人は雪崩により埋没したものと見られ、『日本の雪崩災害データベース』ではこの 6 人が雪崩埋没死亡者とされている。・・・ネット

この事故で、沼津・北嶺登山会で一緒だった、裾野市・葛山の瀬戸敬三（たかみつ）氏が犠牲になった。彼は、静岡頂山岳会に移籍後の事故だった。

また、三島勤労者山岳会創立準備会メンバーだった、田沼勝司氏も犠牲になった。三島勤労者山岳会は、この翌年、杉澤康秀氏（2014 没）らにより正式に発足し現在に至る。

私は、何故かその時は山行がなく、寮で原稿を書いていた。下界でも物凄い嵐だったが、まさか富士山でそのような事故が起きていることは、知る由もなかった。



2021/02/12 富士山

山行 NO. 0155 1972/04/29～5/7 北ア・北鎌尾根～槍ヶ岳～三俣蓮華岳～烏帽子小屋～七倉槍まで東正昭。以後、単独。水晶岳・烏帽子岳に上らなかったのは悔いが残った。



北鎌尾根

5/3 P2 発 1:10～槍ヶ岳 11:15～肩の小屋テン場（泊）12:00



樺沢岳



硫黄乗越から槍



槍ヶ岳山頂？



山行 NO. 0159 1972/07/30～31 南ア・北岳バットレス 第四尾根（後藤・星谷）
 山行 NO. 0161 1972/08/08～15 北ア・劔岳～薬師岳～笠ヶ岳（単独）・・・長い縦走
 山行 NO. 0163 1972/08/30～9/1 南ア・北岳バットレス D ガリー奥壁（後藤・東・星谷）
 第四尾根下部フランケ（東）
 山行 NO. 0167 1972/10/07～8 南ア・北岳バットレス D ガリー奥壁～城塞（後藤・東・
 星谷）、ピラミッド・フェース（東）
 山行 NO. 0169 1972/11/23 ミツ峠・屏風岩 空間リッジ、雲稜ハング（東）
 山行 NO. 0171 1972/12/30～1/2 南ア・北岳（後藤・星谷）

1973 年（昭和 48 年）

世相＝第一次石油ショック、ベトナム和平協定、インフレ、狂乱物価、ピカソ死去、
 ドバイ日航機ハイジャック、ブルースリー死去、金大中事件、巨人 V9
 流行歌＝心の旅、わたしの彼は左きき、個人授業、なみだ恋、街の灯り

山行 NO. 0172 1973/07/08 西丹沢・小川谷（何故かこの年、小川谷が初山行だった）
 山行 NO. 0175 1973/08/11～15 北ア・白馬岳～五竜岳～鹿島槍ヶ岳～針ノ木岳
 （後藤・荻野哲）
 山行 NO. 0178 1973/09/14～17 ハッ・阿弥陀岳北西稜、大同心雲稜ルート（後藤・荻野）
 ・初めて荻野車で遠出（車は、ホンダ N360）
 年末、この車で畑薙ダムまで行った
 ・天候に恵まれ、荻野もよく上った
 ・帰路、R20 が渋滞。甲武信館で一泊して帰静



ホンダ N360（ネット）

山行 NO. 0180 1973/10/13～/14 南ア・北岳バットレス第四尾根（後藤・荻野）
 山行 NO. 0182 1973/11/22～/25 南ア・荒川三山～赤石岳（冬山偵察 後藤・荻野）
 山行 NO. 0184 1973/12/29～01/05 南ア・荒川三山～赤石岳（後藤・荻野）

12/29 沼津 7:00～畑薙 12:40～中の宿 16:00（泊）
 30 中の宿 5:00～滝見橋 8:00～BP18:00（泊）
 31 BP8:00～千枚小屋 10:30（泊）
 01/01 千枚小屋 5:00～千枚岳 5:00（日の出待）～荒川
 東岳 9:00～中岳 11:00～荒川小屋 12:30（泊）
 02 荒川小屋 6:30～赤石岳 8:45～荒川小屋 11:00（泊）
 03 荒川小屋 5:00～中の縮 16:10（泊）
 04 中の宿 7:00～赤石ロッジ 9:30～沼津



赤石岳

1974 年（昭和 49 年）

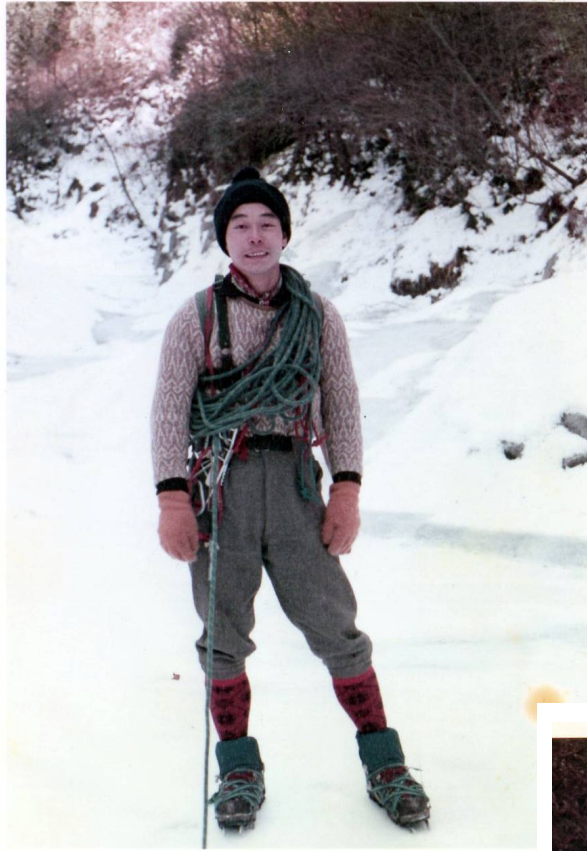
世相＝小野田少尉帰還、モナ・リザ展、ハंक・アーロン 715 号、三菱重工爆破事件、ニクソン辞任、ペレ引退、巨人長嶋引退、佐藤栄作ノーベル平和賞
流行歌＝なみだの操、あなた、うそ、ふれあい、恋のダイヤル 6700、くちなしの花、
激しい恋、積木の部屋、学園天国、私は泣いています、精霊流し

山行 NO. 0185 1974/01/26～/27 西丹沢・ザンザ洞（未結氷）

山行 NO. 0186 1974/02/03 西丹沢・沖箱根沢（氷瀑）



FUJICOLOR 74



昔の西丹沢は、こんな寒かった



山行 NO. 0191	04/28～05/03	白沢～餓鬼岳～燕岳～大天井岳～常念岳～蝶ヶ岳～上高地 (後藤、荻野)
山行 NO. 0194	08/02～/05	巻機山～朝日岳～白毛門 (後藤、荻野)
山行 NO. 0195	08/14～18	白馬～雪倉岳～朝日岳～白鳥山～親不知 (後藤、荻野)
山行 NO. 0199	12/28～31	南ア・茶臼岳～聖岳 (後藤、荻野)

報告書

コースタイム

